

せんしゅう しゅじつ ふくいん さま いつ にひき さかな ごせんにん ぐんしゅう まんぶく くだ  
先週の主日の福音で、イエス様は五つのパンと二匹の魚で、五千人の群衆を満腹させて下さいました。

とき まんぶく ぐんしゅう さま じぶん おう き さま  
その時、満腹した群衆はイエス様を自分たちの王にしようとしてましたが、それに気づかれたイエス様は、  
ふたたび ひとり やま しりぞ いったん ぐんしゅう かいさん み きょう ふくいん かた  
再び一人で山に退かれました。それで一旦、群衆は解散したように見えましたが、今日の福音が語って  
いるように、よきつふたたび あつ ぐんしゅう さま さが で さま み  
翌日再び集まった群衆はイエス様を捜しに出かけ、ついにイエス様を見つけました。しかし、  
もうすでに彼らの本心を知っておられたイエス様は、彼らに「あなたがたが私を捜しているのは、しるし  
を見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」と言われました。それからイエス様は、「朽ちる食  
べ物のためではなく、いつまでもなくなるしないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」と言わ  
れ、更に「これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」とおっしゃいました。それを聞いた  
ぐんしゅう じぶん なに かみさま ごう おこな さま たず  
群衆は自分たちが何をすれば神様の業を行うことになるかについてイエス様に尋ねました。そこでイエス  
さま かみさま つか もの しん い ぜんじつ  
様は、「神様がお遣わしになった者を信じること」だと言われましたが、こうおっしゃったのは、まだ前日  
まんぶく げんそう と ぐんしゅう こころ たましい めざ かれ かみさま しんこう みち みちび ため  
の満腹の幻想に留まっている群衆の心と魂を目覚めさせ、彼らを神様への信仰の道に導く為でした。

みちび したが はじ ぐんしゅう じぶん しん み  
その導きに従い始めた群衆は、自分たちが信じることができるよう、しるしを見せてほしいとイエ  
さま ようきゅう わかし せんぞ あ の てんし かて い た  
ス様に要求しながら、その昔、先祖たちが荒れ野で「天使たちの糧」と言われるマンナを食べたように、  
ぜんじつ きせき いちどおこな もと さま くれ  
前日のパンの奇跡をもう一度行ってくださることをひそかに求めたわけです。そこでイエス様は彼らに、  
ふた 二つのことをはっきりと示されました。まず、先祖たちが食べた天からのパンを与えられたのはモーセでは  
なく、ご自分の御父、つまり、神様だということをはっきりと教えられました。また、その神様が与えて下  
さるパンこそ真のパンで、それは「天から降って来て、世に命を与えるものである。」ともおっしゃいま  
した。そして群衆がその真のパンをいつも頂きたいと言うと、「わたしが命のパンである。わたしのも  
とに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」と言われたのです。

きょう ふくいん かんたん ぜんじつ きせき けいけん ぐんしゅう いちど  
ここで、今日の福音を簡単にまとめてみましょう。前日パンの奇跡を経験した群衆は、もう一度パンを

いただくため<sup>ふたた</sup>再びイエス様<sup>さま さが</sup>を捜し、ついに再会<sup>さいかい</sup>しました。イエス様<sup>さま かれ</sup>は彼らに「永遠<sup>えいえん</sup>の命<sup>いのち</sup>に至る<sup>いた</sup>食べ物<sup>た</sup>のため<sup>もの</sup>に働<sup>はたら</sup>きなさい。」と言われ、彼ら<sup>かれ</sup>を信仰<sup>しんこう</sup>の道<sup>みち</sup>に導<sup>みちび</sup>こうとなさいました。そこで彼ら<sup>かれ</sup>はイエス様<sup>さま</sup>を信<sup>しん</sup>じるため<sup>ため</sup>のしるし、つまり、もう一度<sup>いちど</sup>パンの奇跡<sup>きせき</sup>を要求<sup>ようきゅう</sup>しました。すると、イエス様<sup>さま</sup>はご自分<sup>じぶん</sup>こそが神様<sup>かみさま</sup>からの真<sup>しん</sup>のパンで、自分<sup>じぶん</sup>のもとに来<sup>く</sup>る者<sup>もの</sup>は飢<sup>う</sup>えることがなく、自分<sup>じぶん</sup>を信<sup>しん</sup>じる者<sup>もの</sup>は渴<sup>かわ</sup>くことがないと仰<sup>おお</sup>せになり、イエス様<sup>さま</sup>ご自身<sup>じしん</sup>がしるしとなること<sup>ひとびと しめ</sup>を人々に示<sup>しめ</sup>されたわけです。

**ちょっと考えてみたら、**群衆<sup>ぐんしゅう</sup>は体<sup>からだ</sup>の命<sup>いのち</sup>を守る<sup>まも</sup>る為<sup>ため</sup>のパン<sup>もと</sup>を求めていたことが分かります。しかし、イエス様<sup>さま</sup>は彼らに永遠<sup>えいえん</sup>の命<sup>いのち</sup>の為<sup>ため</sup>のパン<sup>あた</sup>を与えようとされました。群衆<sup>ぐんしゅう</sup>はイエス様<sup>さま</sup>から現世的<sup>げんせつてき</sup>で目<sup>め</sup>に見える<sup>み</sup>食べ物<sup>た</sup>を頂<sup>いただ</sup>いて、日々<sup>ひび</sup>のパンを得<sup>え</sup>る為<sup>ため</sup>の悩み<sup>なや</sup>みを解<sup>かい</sup>消<sup>しょう</sup>したかったのでしょうか。そうすれば、自分<sup>じぶん</sup>たちがやりたいこと<sup>こと</sup>全て<sup>すべ</sup>が叶<sup>かな</sup>えられると思<sup>おも</sup>ったはずです。つまり、彼ら<sup>かれ</sup>が求めていたパンとは、生きて<sup>い</sup>いる間<sup>あいだ</sup>の為<sup>ため</sup>の食べ物<sup>た</sup>物<sup>もの</sup>だったということです。イエス様<sup>さま</sup>は彼ら<sup>かれ</sup>がただ自分<sup>じぶん</sup>たちの命<sup>いのち</sup>を守る<sup>まも</sup>る為<sup>ため</sup>、そして、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>のこ<sup>かな</sup>を叶<sup>かな</sup>える為<sup>ため</sup>だけの食べ物<sup>た</sup>に捕<sup>と</sup>らわれているのを憐<sup>あわ</sup>れに思<sup>おも</sup>われました。また、その欲心<sup>よくしん</sup>や欲望<sup>よくぼう</sup>の為<sup>ため</sup>に、様々<sup>さまざま</sup>な争<sup>あらそ</sup>いを続<sup>つづ</sup>けながら、あらゆる罪<sup>つみ</sup>と咎<sup>とが</sup>を犯<sup>おか</sup>している人々<sup>ひとびと</sup>を諭<sup>さと</sup>し、真<sup>しん</sup>の命<sup>いのち</sup>の道<sup>みち</sup>に導<sup>みちび</sup>こうとされました。その道<sup>みち</sup>とは勿論<sup>もちろん</sup>、神様<sup>かみさま</sup>への信仰<sup>しんこう</sup>の道<sup>みち</sup>で、イエス様<sup>さま</sup>はご自分<sup>じぶん</sup>がその信仰<sup>しんこう</sup>の為<sup>ため</sup>の証<sup>あか</sup>しとなること<sup>こと</sup>を、今日<sup>きょう</sup>の福音<sup>ふくいん</sup>を通<sup>とお</sup>して示<sup>しめ</sup>されたのです。言い換<sup>い</sup>えれば、自ら<sup>みづか</sup>永遠<sup>えいえん</sup>の命<sup>いのち</sup>の為<sup>ため</sup>の食べ物<sup>た</sup>、すなわち、神様<sup>かみさま</sup>のみ旨<sup>むね</sup>を果<sup>は</sup>たす為<sup>ため</sup>の神様<sup>かみさま</sup>の小羊<sup>しょうひつじ</sup>となること<sup>こと</sup>です。全て<sup>すべ</sup>の人<sup>ひと</sup>の命<sup>いのち</sup>を救<sup>すく</sup>い守<sup>まも</sup>る為<sup>ため</sup>、自ら<sup>みづか</sup>の命<sup>いのち</sup>をも捨<sup>す</sup>てること。これこそがイエス様<sup>さま</sup>が与<sup>あた</sup>えようとされたパンで、私<sup>わたし</sup>たちはそれを頂<sup>いただ</sup>いて、自分<sup>じぶん</sup>もイエス様<sup>さま</sup>のような愛<sup>あい</sup>のパンとして生きていくこと<sup>こと</sup>を望<sup>のぞ</sup>んでいるわけです。そうすることで、私<sup>わたし</sup>たちもイエス様<sup>さま</sup>の永遠<sup>えいえん</sup>の命<sup>いのち</sup>に与<sup>あずか</sup>れること<sup>こと</sup>を信<sup>しん</sup>じているから<sup>から</sup>でしょう。ですから、今日<sup>きょう</sup>の第2朗読<sup>だいにろうどく</sup>で使徒<sup>しと</sup>パウロ<sup>すす</sup>が勧<sup>すす</sup>めているように、様々<sup>さまざま</sup>な欲望<sup>よくぼう</sup>に拘<sup>こたわ</sup>らず、滅<sup>ほろ</sup>びに向<sup>む</sup>かっている古<sup>ふる</sup>い人<sup>ひと</sup>を脱<sup>ぬ</sup>ぎ捨<sup>す</sup>て、心<sup>こころ</sup>の底<sup>そこ</sup>から新<sup>あら</sup>たにされて、神様<sup>かみさま</sup>に象<sup>かたど</sup>って造<sup>つく</sup>られた新<sup>あた</sup>しい人<sup>ひと</sup>を身<sup>み</sup>に着<sup>つ</sup>け、真<sup>しん</sup>理<sup>り</sup>に基づ<sup>もと</sup>いた正<sup>ただ</sup>しく清<sup>きよ</sup>い生活<sup>せいかつ</sup>を送<sup>おく</sup>るべきです。その身<sup>み</sup>に着<sup>つ</sup>けるべき新<sup>あた</sup>しい人<sup>ひと</sup>とは誰<sup>だれ</sup>でしょうか。それは言う<sup>い</sup>うまでもなく、イエス・キリスト<sup>きりすと</sup>でしょう。イエス様<sup>さま</sup>の慈<sup>いつく</sup>しみと愛<sup>あい</sup>の生き方<sup>い</sup>に沿<sup>かた</sup>って生<sup>い</sup>きることこそが、

わたし しん かにん かん た もの ちが  
私たちの真の糧、真の食べ物に違いありません。

ところで、カトリック教会には四つの重要な教えがあります。それは、「唯一の創造主である神様はおられる。神様のみ言葉である御独り子が人となって死と復活を通して救いの御業を全うされた。神様は父と子と聖霊の三位一体の方である。聖霊に導かれて、福音に従い、愛の良い業を行う人には良い報いが、そうではない人には永遠の罰が与えられる。」ということです。まるで、神様の慈しみと愛による救いの歴史がすぐ分かるような気がします。この四つの教えは、とても大事で、誰もが危篤におちいた時、これさえ信じると表明したら緊急洗礼を頂けるのです。私は子供たちの初聖体の前、最後の面談の時、いつもこの四つのことについて子供たちに質問します。永遠の命のパンであるイエス様の御体、つまり、ご聖体を頂く為の基本的な信仰の内容を知っているかどうか、また、信じているかどうかを確かめる為です。まだ幼いので、子供たちのほとんどははっきり答えられませんが、その場合にはその場でもう一度教えてあげます。今日の福音でイエス様は、まるで群衆の初聖体を準備させるようです。イエス様は神様の愛の証し、或いは、しるしとしてご自分の命を捧げ、更に、ご聖体の形でいつも私たちと共にいてくださいます。そのイエス様を信じ、イエス様と共に愛の働きを続ければ、必ず良い報いが与えられるでしょう。私たちがいつも初聖体の時の心を忘れず、神様の恵みと力を頂いて、イエス様と共に生き、共に働くことができるよう、お祈り致します。